**＜まる見えリポート＞2016参院選みえ　芝氏、野党一本化奏功するか**

　二十二日公示、来月十日投開票の参院選まで一カ月を切った。三重選挙区（改選数一）では、民進党現職の芝博一氏（66）と、自民党県連が擁立した新人の山本佐知子氏（48）が激突。二期十二年のベテランとして知名度抜群の芝氏を、山本氏が激しく追いかける構図となっている。民進党の岡田克也代表のお膝元で同党が議席を死守するのか、自民が二十五年の前回選に続き、連続奪取を果たすのか―。同選挙区の情勢を展望した。

（中森敬子）

　今回共産党が候補予定者を取り下げ、野党候補が芝氏に一本化した。  
  
　前回選では、旧民主党現職の高橋千秋氏が自民党新人だった吉川有美氏に約五万六千票差で惜敗。単純計算だけで言えば、共産党候補の得票約六万票を積めば逆転していた可能性もあり、一本化は好材料の一つ。  
  
　民主党時代、政権交代が実現した平成二十一年の衆院選でも共産党が候補者擁立を一部見送ったことが、躍進の原動力の一つとなった。陣営では共産票の上乗せに期待を寄せる。  
  
　また、前回選では日本維新の会の候補者が出たことで非自民票が分散したことも痛手となった。しかし維新は分裂し、県内では松田直久衆院議員が民進党に合流。そのため今回は維新票も一定見込まれることになった。前回選で維新候補は約七万票獲得しており、「その半分でも取り込めれば」（民進党関係者）とする。  
  
　ただ、懸念もある。芝氏は元神職で、鈴鹿市選出の県議時代から保守層が地盤。本人も保守を自負してきた。共産党からの協力を得ることに対し、「離れていく支持層もあるのではないか」（民進党関係者）との見方もある。芝氏も危機感を覚え、支持層のつなぎとめに懸命という。  
  
　一方で、市民連合の呼び掛けでSEALDsのイベントに参加するなど、若者はじめ幅広い層への支持拡大も目指す。芝氏周辺は「今までのコワモテのイメージを変えるいい機会だ。若者や女性層に積極的にアピールしていきたい」とする。  
  
　そんな芝陣営にとって、「最大の脅威は鈴木英敬知事」（芝氏に近い新政みえ県議）という。  
  
　県政界随一の人気者と化した知事には、自民から次期衆院選に出るのではとの憶測がつきまとう。  
  
　その知事は十日の四日市市での山本氏の決起大会で、「自公政権に期待したい」と応援演説したことで、民進党関係者に衝撃が走った。今のところ、鈴鹿地域などにある知事の強力な応援部隊は動いていないとするが、、知事の一挙手一投足を警戒している。  
  
自民の山本氏は、祖父が自治大臣などを務めた大物政治家、山本幸雄（衆議院旧三重１区）。この山本氏の地盤を継いだのが民進党の岡田代表とあって、因縁めいた装いを呈している。  
　山本氏の追い風は、伊勢志摩サミットの開催。サミット特需などもあり、「サミット＝政権与党の功績」として弾みをつけたい考えだ。  
  
　さらに鈴木知事が決起大会で、自公政権への応援を表明したことで、「大いなる援軍となった」（自民党県連幹部）と喜びを隠せない。ただ、知事は公務優先のため、どこまで現実的に応援してもらえるのか未知数とするが、「今後も積極的に応援してもらいたい」とする。  
  
　不安材料は知名度不足。投票日までに全県下でどこまで底上げできるかが課題。安倍首相が応援入りするなどして、「自民」を全面に出して知名度不足をカバーしたい狙いもある。  
  
　さらに自民党県連の主導力も問われている。かねてから「自民党は自分党」と呼ばれるように、国会議員や県議らの個々の後援会や支持層は強固だが、「いざ他人の選挙となると足並みがそろわなかったり、逆に足の引っ張り合いも見受けられる面がある」（自民党関係者）と指摘される。組織として一致団結して戦いに臨めるのか、正念場となっている。  
  
　とはいえ、新政みえと連合三重が主力部隊の民進党と違い、市町議や業界団体など県内くまなく支持基盤が張り巡らされているのが強み。さらに、抜群の集票力を持つ公明票の取り込みも期待される。  
  
　三重選挙区ではほかに、幸福実現党新人の野原典子氏（59）が立候補を予定している。